

有恒さんを悼む

井手 貴夫



ありし日の日本山岳会第3次マナスル登山隊
(1956年)、ナイケ・コロの前進基地で指揮を
とる横隊長。撮影=依田孝喜

武田久吉さん、松方三郎さんと親しくしていただいていた日本山岳会の大立物が次々となくなつて行つて、淋しく思つていた所へ、とうとう横さんもなくなつた。横さんには以上のお三方の中でも特に親しくしていただいていたので、誠に山岳界の巨星落つという思いを深い悲しみを以て惻々と感ぜずにはいられない。日本の登山界に近代的登山方法を紹介導入された大先達の横さんに、山が好きでこそあれ、一介の登山愛好者に過ぎない私が、どうしてこんなに親しくしていただいたのか、自分でも不思議に思うのであるが、あるいは横さんという方は山好きの後輩が慕いよつてくるならば、だれにでもその誠実なお人柄を開いて下さつたのではないかという気がする。

横さんが日本の山岳界の発展に奇与されたその大きなご功績については私などがとやかくいうよりは登山界を代表する方々が夫々に仔細を述べられるであらう。横さんとの最初の出会いがどうであつたか、全く記憶がない。ただ昭和三十五年に初めて渡欧するに際して、夕方銀座で食事をご馳走になりながら、スイスの話など伺つた。横さんが、一九二一年、即ち大正十年九月十日に初めてアイガーの東山陵から登頂した時の案内人だつたフリッシ・シュトイリの弟のエーミールの経営するホテルや、矢張り当時の案内人だつたサミュエル・ブラーヴァントにご紹介いただいたのもその時である。ブラーヴァントは私がお会いした時はベルン州の建設大臣で、後にベルン州顧問として、例の氷河鉄道会社の社長をしておられた。氏の著作の「グリンデルヴァルトの山案内人」を茗溪堂から翻訳出版したのもその時お会いした縁であつた。ブラーヴァントの山案内人手帳に書かれてあつた横さんのドイツ文は誠に立派な

文章であつた。ブラーヴァントと横さんの出会いは横さんのお人柄を偲ばせる好例である。横さんが当時宿泊していたホテル・アードラー(鷲屋)の主人が、ドイツ語を習いたいという横さんの希望を當時小学校の先生をしていたブラーヴァントに依頼した。しかし、忙しいからと断るのを、「実に立派な好ましい人柄だから会つて見られては……」と勧められて会つて見ると実に素晴らしい好青年だったので、それは単なるドイツ語の授業にとどまらずに、二人の登山に発展したのである。

横さんの本格的な登山の相手がブラーヴァントのような優れた人物であつたことは日本の近代登山の發達に非常な幸であつたと思う。松方三郎さん、秩父宮を初め多くの日本の山岳界の優れた先達はブラーヴァントの指導を受けたと聞いている。

ヨーロッパから帰つてからは、上京の度にいつも横さんにお会いしていた。

横さんが製糖会社の役員をしておられた関係で、いつも糖業会館の食堂でご馳走になつた。その都度主な話題になつたのは、スイスのことは勿論だが、当時私が北海道自然保護協会の理事長をしていた関係で、大雪の赤岳から樺合平に至る觀光道路、然別湖の山岳道路、大雪縦貫道路問題、恵庭岳の滑降コースのことなどその当時問題になつていた事柄がよく話題になつて、いつも励ましていただいた。横さんが協会の会員になられたこともそういうわけからであつたが、私が体を悪くして日本山岳会を退会したのに、今だに横さんが道自然保護協会の会員に止つて下さつたことは本当にありがたいことである。いつだったかお会いした時に十七世紀オランダの哲学者で、汎神論を唱導したスピノザのことを聞かれて、充分なお答えができなくて恥かしい思いをしたことがあつた。そういうことにも関心を持つておられる横さんの広い知識欲は、横さんの書物からも察せられることである。横さんがもう七、八年前に倒れた後一度茅ヶ崎にお見舞に伺つたが、思いのほかにお元気で、安心したが、その後二度、三度とお倒れになつて、ついにお見舞に行けないまま亡くなられたことは本当に残念である。謹んで心からおくやみ申し上げる。

なお横さんのお名前の有恒はユーコーと読む。横さんは物心ついでから家族からユーコーといふも呼ばれていたそう、十数年前に親しい人達に、ユーコーが正しい呼び名であることを郵便で連絡したことがあつたそうである。あるいは戸籍名がアリツネとなつているのかも知れない。アイガー・東山陵初登頂の時マキ・ユーコー初登頂の電報で当時の新聞社は男か女かと迷つたそうである。

横 有恒(まき ゆうこう)
一八九四年宮城県に生る。
慶大法学部卒。一九二一年アイガー東山
根、二十五年カナダ、アルバータに初登
頂。六十六年第三次マナスル登山隊長と
してヒマラヤの処女峯マナスル初登頂に
成功。日本を世界の登山国家に成長させ
る基礎を築いた。
文化功勞者。